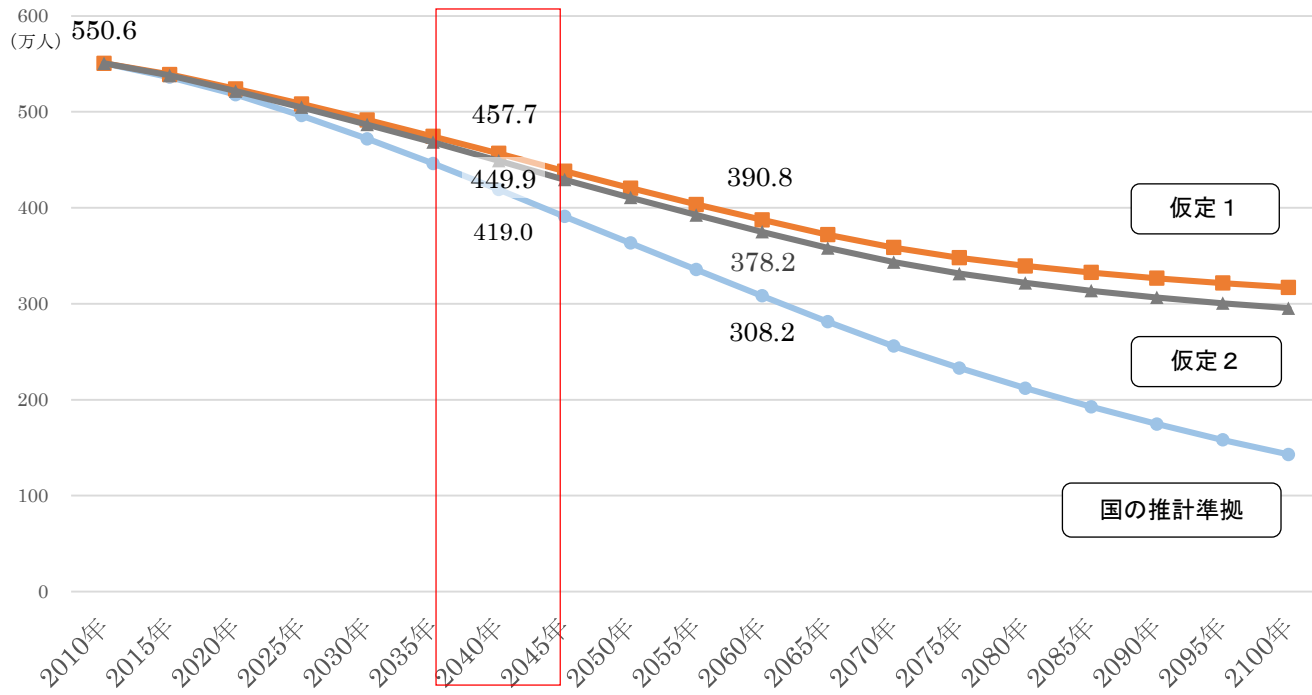


人口の将来展望

・今後、札幌市をはじめ道内各地域において、自然減、社会減の両面からの対策が効果的かつ一体的に行われ、その施策効果により合計特殊出生率が向上し、道外への転出超過が抑制された場合には、2040年時点で、460～450万人の人口が維持される見通し。



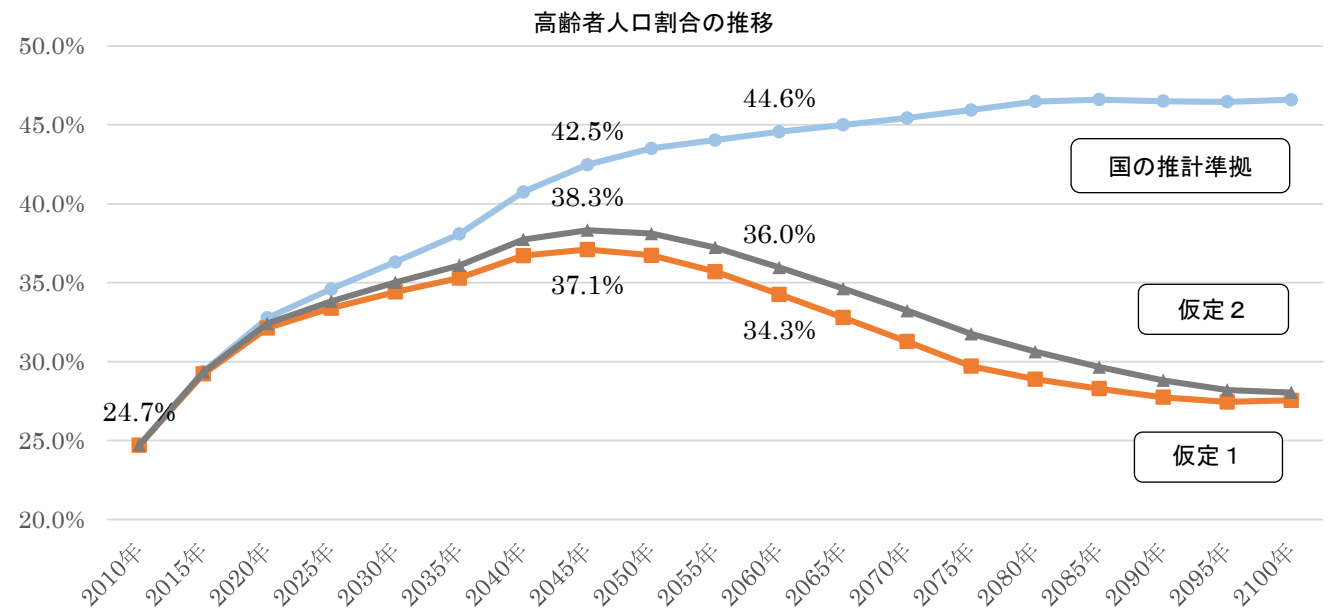
仮定1：2040年の人口約458万人

- ① 自然動態（合計特殊出生率）
2030年：1.8、2040年：2.07
- ② 社会動態（純移動数）
2019年：転出超過数を現在の約半分にする
2025年：社会増減数を均衡 (=0) させる

仮定2：2040年の人口約450万人

- ① 自然動態（合計特殊出生率）
・札幌市 2030年：1.5、2040年：1.8、2050年：2.07
・札幌市以外は**仮定1**と同様
- ② 社会動態（純移動数）
仮定1と同様

・高齢者の人口割合は、国の推計が2040年を超えても上昇していくのに比べ、人口構造の高齢化抑制の効果が2045年頃に現れ始め、その後、低下する。



北海道人口ビジョン(原案)の概要

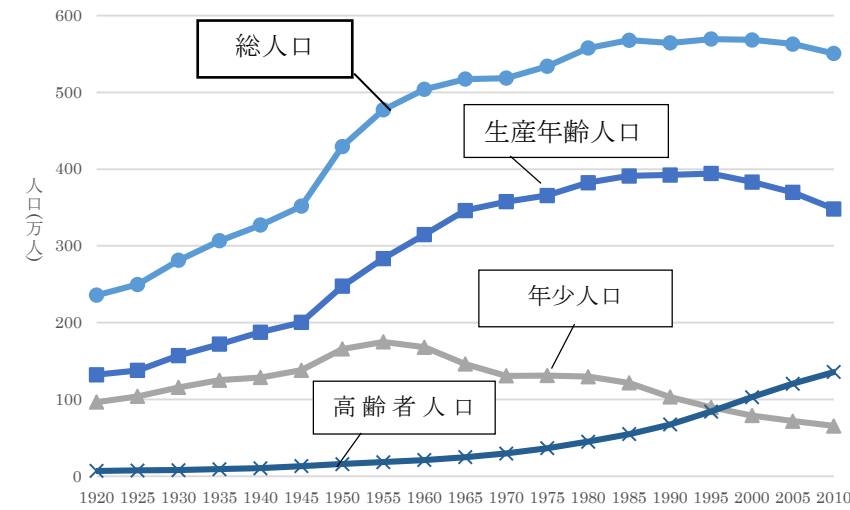
資料1

～北海道の人口の現状と展望～

平成27年9月 北海道

北海道の人口動向

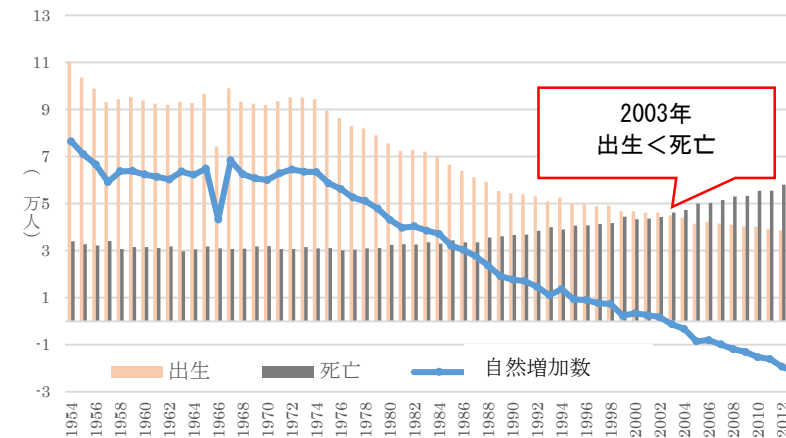
1 総人口



- ・本道の人口は、1997年の約570万人をピークに、全国より約10年早く人口減少局面に入り、2010年の人口はピーク時よりも約19万人少ない550.6万人となっている。
- ・1990年代後半、生産年齢人口は減少に転じ、高齢者人口が年少人口を上回った。
- ・2013年の自然減は約21,000人、社会減は約8,000人となっている。

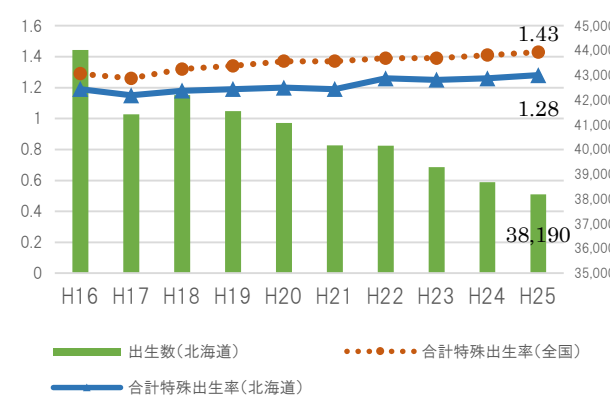
2 自然増減

出生数・死亡数・自然増加数の推移（北海道）

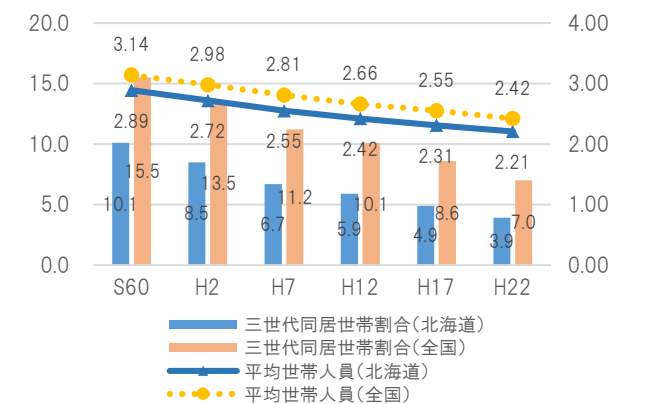


- ・2002年までは、死亡数が出生数を下回っていたため、「自然増」の状態が続いていたが、2003年から死亡数が出生数を上回る自然減に転じている。
- ・未婚・晩婚・晩産化のほか、本道は全国と比較して核家族化が進んでいることや若年者の失業率が高いことなどから、全国より低い出生率が続いている。

出生数・合計特殊出生率の推移（全国・北海道）



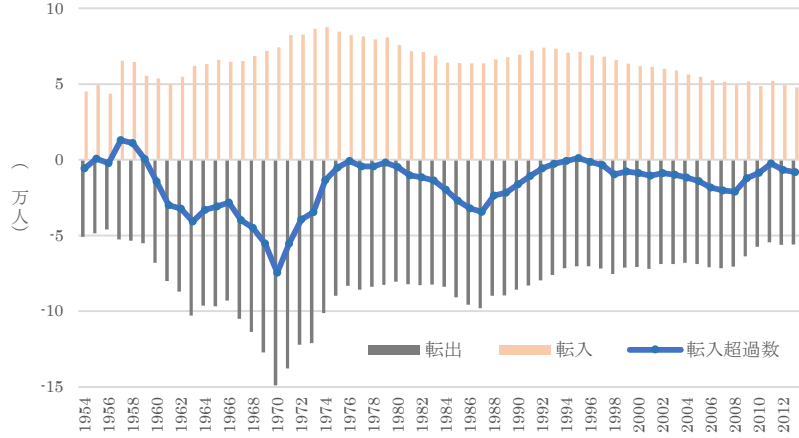
核家族化の状況（全国・北海道）



北海道の人口動向

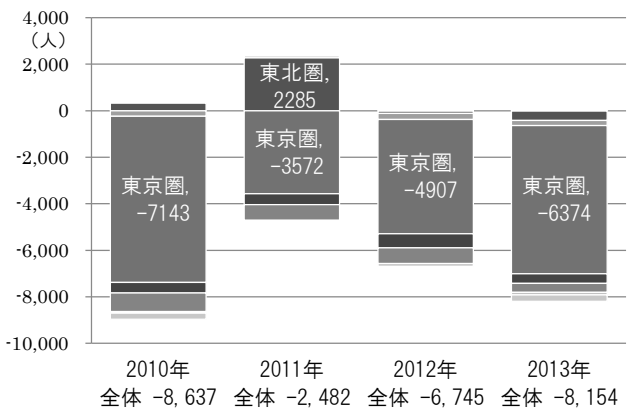
3 社会増減

転入数・転出数・転入超過数の推移（北海道）

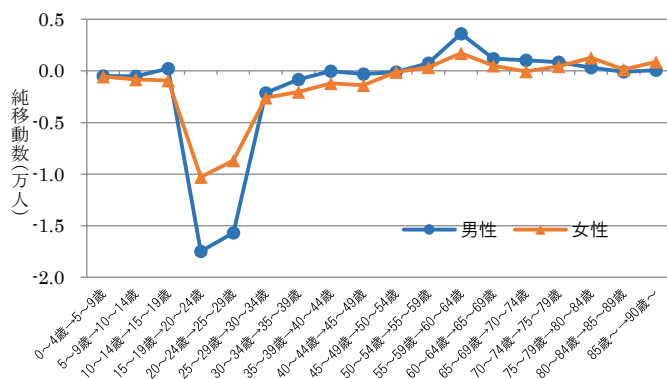


・半世紀にわたり道外への転出超過が続いており、その主な要因は若年者の進学・就職に伴う首都圏への転出であると考えられ、特に男性の転出超過が顕著である。

地域ブロック別の人口移動の状況（北海道）



性別・年齢階級別の人口移動（北海道）2005年→2010年



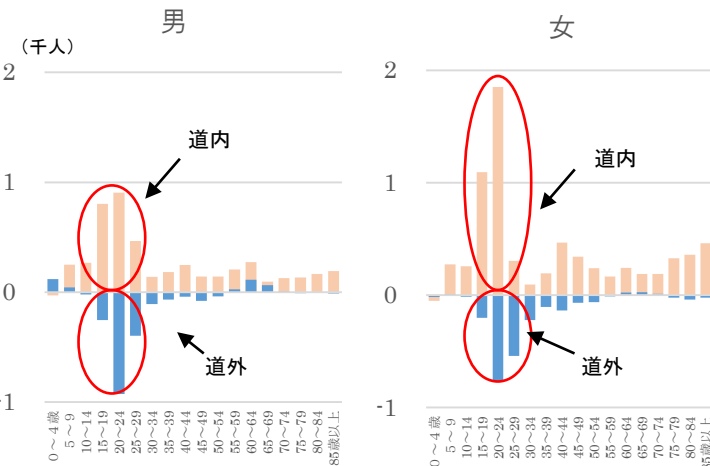
4 札幌市への一極集中

札幌市への人口集中割合（1970年～2010年）

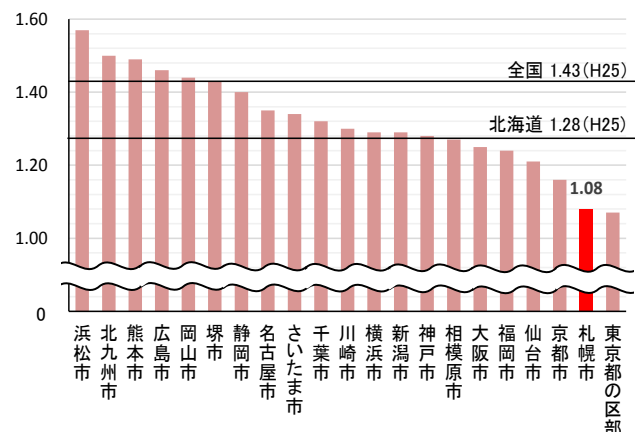
	1970年	1980年	1990年	2000年	2010年
北海道	5,184,287	5,575,989	5,643,647	5,683,062	5,506,419
札幌市	1,010,123	1,401,757	1,671,742	1,822,368	1,913,545
割合	19.5%	25.1%	29.6%	32.1%	34.8%

・札幌市への人口集中が進んでおり、20～24歳の男性については、札幌市から道外への転出と道内他市町村からの転入が拮抗しているが、同世代の女性は道内他市町村からの転入が多い。
 ・全道人口の3分の1を占める札幌市の低い出生率は、北海道全体の出生率に大きく作用している。

男女・道内・道外・年齢別転入超過数（札幌市2014（H26）年）



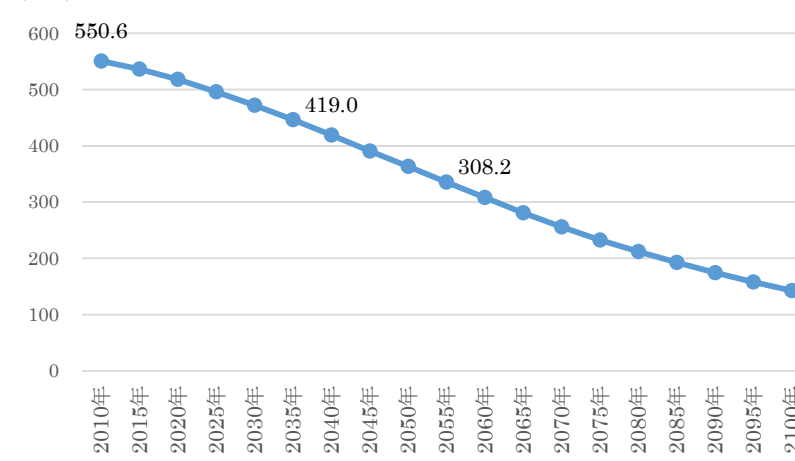
21大都市の合計特殊出生率（H20～24年）



将来人口の推計と減少による影響分析

1 将来人口の推計

総人口推計（国による推計）

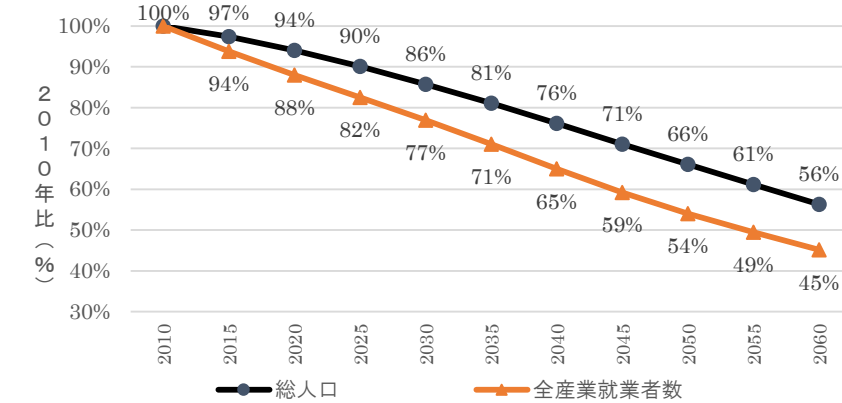


・国（国立社会保障・人口問題研究所）の推計によると、今後、何も対策を講じない場合には、2040年の人口は419万人となる。

2010年 550万人
↓
2040年 419万人

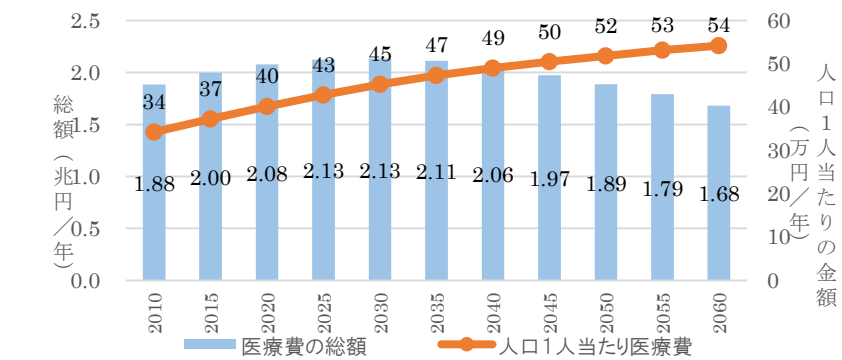
2 人口減少が地域の将来に与える影響の分析・考察

全産業就業者数の将来推計



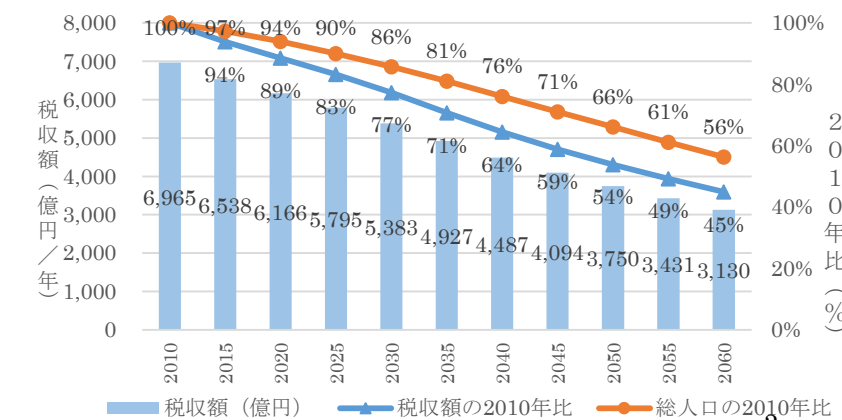
・生産年齢人口の減少と高齢化の進展による非就業者の増加により、将来の就業者数は総人口を上回るスピードで減少する。
 ・就業者数の減少による人手不足は、地域活力の低下や農林水産物の供給力の低下を招くことが懸念される。

医療費総額及び人口1人当たりの金額の将来推計



・医療費の総額は、2025～2030年をピークに減少し、地方部における医療施設の撤退や身近な受診、受療機会の減少、通院時間の増加等が懸念される。
 ・高齢化に伴い、一人当たりの医療費は増加することにより、若年層や現役世代の負担増が懸念される。

税収額の将来推計



・税収額は、生産年齢人口の減少に伴い、人口減少割合を上回るスピードで減少する。
 ・税収の減少に加え、医療費、介護給付費の増加が見込まれていることから、行財政を取り巻く環境は更に悪化することが懸念される。